

パネル・ディベートがもつ力

計画的・継続的な学習

情報活用能力を育てるために討論を位置付けます。そうすることで、一人一人が自ら必要な情報を手に入れ、相手にわかりやすく伝えようとする態度が育っていきます。そのためには、生徒が興味・関心をもち、なおかつその見方が多面的になされるような論題を設定しなければなりません。

年に1回や2回の討論を行ったからといって、論理的な思考力が育つものではありません。それは、計画的・継続的な学習により育つものです。そのためには、説明的文章とつなげたりして、年間指導計画にしっかりと位置付けていくことが大切です。

今後の課題

問題点として、情報収集や分析の力を培うということが、具体的にいつどのように行われているのかが見えにくいということがあります。また、書く学習では、全体的に活動と付けるべき国語科の作文力との関係が曖昧であることが挙げられます。

パネル・ディベートの力

一度や二度で論理的な文章力が鍛えられるわけではありませんが、今回の実践によって、少なくともその手がかりは増えてきたように思います。学級の大半が作文嫌いだったにも関わらず、抵抗なく意見文を書き進めることができたのは、パネル・ディベートの力によるところが大きいと言えます。

第二次意見文

告知

私は、やはり素直に病名を告知するべきだと思います。理由は2つあります。

まず一つは、その人が残された時間を有意義に過ごすためです。人それぞれ、やりたかったこと、言いたかったことなど、悔いの残ることはあると思うし、それを果たせないで死んでしまったら、その人がかわいそうだからです。

二つめは、告知しなくてもいずれ本人には知られてしまうと思うからです。もし知ってしまったら、その人はとても不安な気持ちになると思います。告知しても不安になるとは思いますが、それとは違う不安です。告知されたらその病気とみんなでたたかっているんだという気持ちになってくるとは思いますが、自分で気付いてしまった場合は、家族や医師に聞くのは怖いし、誰にも言えず、一人で病気とたたかうことになってしまうのではないのでしょうか。それはやっぱり、ちがう不安だと思います。

私は、これらのことにより、医師は患者に病名を告知するべきだと思います。もし自分がそういう立場だったらと考えてみても、やっぱり告知してほしいです。

パネル・ディベートの可能性

ディベートの教育的効果は認めますが、万能というわけではありません。特に2つの立場に限定されることの功罪は考慮する必要があります。ディベートに基盤を置きつつパネルディスカッションの特長を取り入れたパネル・ディベートならばどうでしょう。

2つの立場にこだわらず、多面的に問題を検討し、フロアからの参加も得て活発に討議を展開するパネル・ディベートこそが、ディベートを超える新しい討論形態になり得るのではないのでしょうか。この討議法であれば、立場の設定はより具体的になり、議論は現実に根ざしたものとなります。そして、議論は議論で終わらずに、現実の問題にどう対応すべきかについて、深い示唆を与えることとなります。